(C)新潟日報社 無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

提言フォーラム「10年後 さらに輝く地域へ」 詳報

上越の将来像 多彩に

新潟日報社が上越地域で展開した「未来のチカラin上越」の中核となる提言フォーラム「10年後 さらに輝く地域へ」が6月22日、上越市の高田公園オーレンプラザで開かれた。花角英世知事が基調講演を行い、本県の充実した「食」や、インバウンド（訪日観光客）を引きつける「雪」を軸とした観光戦略を報告した。上越、糸魚川、妙高の市民代表は、3市が知り合う場の必要性や、人工知能（AI）の時代に即した情報発信の在り方などを提言。3市長を交えたパネルディスカッションでは提言を基に、地域の連携や将来像について熱い議論が展開された。

3市代表による提言発表

上越

関係人口増やし 幸せに

野本　幸さん

（NPO法人上越はつらつ元気塾理事・事務局長）

10年後の上越には協働の力が欠かせない。行政任せではなく、自ら動く仕組みづくりが必要となる。上越市はNPOや地域づくり活動が盛んだ。私自身も10年来、行政とNPOの協働に関わっている。（協働の）形は進化し、行政とNPOだけではなく、さまざまな連携が始まっている。

これだけ上越で盛んな理由は「言い出しっぺ」が動いているということ。チーム上越はまさにその集まりだった。雪室で貯蔵、熟成した食材を活用した商品開発などを展開する「雪だるま財団」や、空き家の減少に向けて雁木（がんぎ）、町家を知ってもらえるように活動する「Kinaiya」など、今後10年を考えた時にこのメンバーの活動こそ大きなヒントになると思う。

メンバーの活動するフィールドから見る10年後の未来への提言を挙げる。地域の財産を生かそう。関係人口、交流人口を増やそう。資源を保存して人を集めよう。地域の人と幸せになろう。食と職をつなごう。企業のチカラを地域に生かそう。

地域間の連携が必要というが、どう連携していいか分からない、3市の連携が見えないという意見が出た。そもそも上越の人は糸魚川、妙高を知らない。上越市内でも合併した旧町村部は分からないという声が多い。どう連携するかの前に、どう付き合うか、どう知るかが大事ではないか。

10年後の可能性を広げるためにまずは知り合いたい。3市が知り合う場をここ上越からつくれないか。まずはそれぞれの民間活動ベースで連携してはどうだろうか。

糸魚川

「量より質」 満足度向上

清水　靖博さん

（能生町観光物産センター取締役）

潜在力を生かした10年後の糸魚川に何が必要かについて考えた。糸魚川にはマイナーな魅力がある。マイナーと言うとイメージは良くないかもしれないが、特別な魅力が集まっているということ。「量より質」の身の丈に合った受け入れをし、「糸魚川スタイル」で満足度の向上に磨きをかけたい。

糸魚川には世界ジオパークや、親不知や弁天岩などの景色、ヒスイなど特別な魅力がある。「父ちゃんが捕って母ちゃんが売る」スタイルのカニで知られるマリンドリーム能生では、サザエ取り体験も好評だ。インストラクターは海洋高校の生徒で、生徒の成功体験にもなっている。

この地域でないとできないもてなしも重要だ。もてなしに関しては、全国の温泉地から選ばれる「温泉総選挙2018」で、糸魚川市からは二つの温泉（長者温泉、柵口（ませぐち）温泉）が受賞した。

糸魚川スタイルを確立するには、人口減少や高齢化の中で地域コミュニティーをどう形成するか課題がある。若い層の育成や郷土愛醸成とともに、市外の人材との連携も重要になる。訪れた人が地域を移動する2次交通にも課題がある。

長野県白馬村に滞在する旅行客を夕食時間帯に糸魚川へ運ぶシーフードシャトルバスの取り組みが続いている。上越は関東、長野、北陸、関西、中部を結ぶ「環状線」の軸になれる。新潟、富山、小松、松本など各空港の活用もできる。広域の視野を持ち一体でモノ、コト、ヒトを育てるため連携してできることから始めたい。

妙高

縁・時・心の価値を豊かに

田村　英幸さん

（妙高農園やさい家Sun代表）

インバウンドについて市民の声から考えてみたい。まず妙高戸隠連山が国立公園になったが「だから何？」という声がある。地元の人間が価値を認識しておらず、外国人観光客へのアピールにつながっていない。次に、市営路線バスの時刻表が分かりにくく、接続も悪いという。既存交通資源が生かされていない。外国人観光客の立場からすると、行きたい場所があっても経路が分からない。

妙高には自然環境保護、情報発信や交通インフラの充実など課題があるが、私たちは大切にしたい価値観として「縁持ち、時持ち、心持ち」を掲げた。人と人のつながりやゆっくりと過ごせる時間、心持ちではおいしい食材を味わっていただく。お金持ちではなく、縁、時、心という価値が豊かな地域を目指すべきだ。

その価値観から理想の姿を見据え、未来への提言とする。一つ目は国内外への情報発信。AIやIoT（モノのインターネット）など時代に即して内容も変化させる必要がある。二つ目は自然を守り生かす地域。静けさを生かしたり、スキー以外の雪の観光資源化を進めたりし、自然環境の価値を見直すべきだ。最後に、若者が働き、住み続けたいと思える地域。若者の雇用、学びやすい環境、観光客との交流、2次交通の拡充など、10年後に向けてしっかり取り組むことが必要だ。

まずはやってみること。やってみれば新しい結果も出るし、ブラッシュアップしていくことが住みやすい上越地域になる。3市で連携し、よりよい地域にしていきたい。

約480人が来場したフォーラムの会場。上越地域の将来像を考えた＝6月22日、上越市

来場者の声

冬季宿泊の8割 外国人客

妙高市の旅館経営、小林義徳さん(77)

赤倉で旅館をやっているが、冬季の宿泊は8割が外国人旅行者で勢いと重要性を感じている。3市の連携をさらに深め、地域の宝を掘り起こしていってほしい。

謙信公はじめ歴史がある

上越市板倉区の自営業、林田信隆さん(73)

上越には謙信公をはじめ歴史がある。将来にどう生かすかグランドデザインを考えるにあたり、ディスカッションで提言された「環状線」の話などが良かった。

核になれる可能性感じた

上越市の公務員、金巻遼弥さん(22)

糸魚川の提言の環状線構想が印象に残り、近県や各地域との連携で上越地域が核になれる可能性が感じられた。自分にも何ができるかを考えていきたい。

深雪花
みゆきばな
岩の原ワイン

株式会社 岩の原葡萄園

〒943-0412 新潟県上越市北方1223 TEL(025)528-4002

私たちは上越地域の明るい未来のために、ともに歩みます

えちごトキめき鉄道株式会社
代表取締役社長 嶋津忠裕

糸魚川商工会議所
会頭 [illegible]

新井商工会議所
会頭 [illegible]

上越商工会議所
会頭 [illegible]

お店を元気にする広告を提案いたします！
地域を元気にするイベントを企画いたします！
ふるさとの元気は私たちが創ります！

総合広告代理店 株式会社オアシス
ホームページ go-go-oasis.jp
〒943-0861 新潟県上越市大和5-7-15
TEL.025-520-7626 FAX.025-527-3271
e-mail : go-go-oasis@bh.wakwak.com

高田 世界館
ジジイの映画館。でも未来に漕ぎ出すぜ！

NPO法人 街なか映画館再生委員会
〒943-0832 上越市本町6丁目4-21
「東京裁判」（デジタルリマスター版）8月15日〜上映開始

花角知事基調講演

それぞれの個性 表現して

新潟県は広いからこそ、個性あふれる地域がたくさんある。各地域が個性を持って輝いてくれる。

観光地の満足度について調べると、県全体は「大変満足」が20%。（「満足」「やや満足」でなく）「大変」が付かないと、なかなかリピーターにはならない。出発地や年代も見てみると、3分の1は県内客で、50代以上が中心になっている。そして、食べ物が魅力の中心になっている。

ブランド総合研究所の「食事がおいしい都道府県ランキング」では、新潟県は2016年の10位から18年は4位に上がっている。食に力を入れてプロモーションをしていきたい。なぜおいしいのかを物語としてブランド化し、上質な食を売り込んでいきたい。デスティネーションキャンペーンもある。「妙高・上越」エリアは「戦国時代の保存食が今でも残り、気候風土に合わせた発酵・醸造文化」として発信する。

インバウンドを見ると、妙高はオーストラリアの観光客が多い。スキー客が来ている。糸魚川は韓国が多い。富山空港から入国し、立山黒部アルペンルートを旅行する客が糸魚川で宿泊している。

中国マーケット向けのプロモーション動画では、「雪の新潟」に引きつけている。中国は22年に北京で冬季五輪があり、国としてウインタースポーツ人口を増やそうとしている。

外国人観光客に日本で関心のあるものを聞くと、やはり食は外せない。そして、日本人との交流を挙げる人も多い。文化体験などが挙げられるだろう。

新潟県内それぞれ個性があって、持っているものがたくさんある。これに地域に住む人たちが気づき、どう外に向かって表現するかを考えていかなくてはならない。上越地域は、NPOの活動など、コミュニティーの厚みを感じる。

人のつながりを使って外へ表現していく。そういう取り組みがもっともっと元気になるように、心から期待したい。

主催者あいさつ

誇り持ち 地域輝かせよう

新潟日報社

小田敏三・社長

平成から令和へ、新しい時代へ変わったとき、新聞社にも新しい活動の在り方があるのではないか。「未来のチカラ」は、地域と地域、人と人とをつなげ、地域が連携することでそれぞれが輝いていくプロジェクト。記者、スタッフ全員が地域に出向き皆さんと膝詰めで話をさせていただいて、「地域の宝を再発見して、皆さんが誇りを持って地域を輝かせていこう」ということでスタートした。

北陸新幹線ができたことにより、上越には北陸というすごい後背地がある。4年後には福井・敦賀から関西へも窓が開かれる。上越は発展する潜在力を持っている。その思いでまずは上越地域でスタートした。第2弾は魚沼が中心。さらには各地域へとつないでいく。

木村　隆氏
米田　徹氏
入村　明氏
村山秀幸氏
野本　幸氏
今田亜樹氏
清水靖博氏

地域間連携の必要性や、2次交通の充実などについて議論した提言フォーラム＝6月22日、上越市

パネルディスカッション

◇パネリスト
村山秀幸・上越市長
米田徹・糸魚川市長
入村明・妙高市長
野本幸・NPO法人上越はつらつ元気塾理事・事務局長
清水靖博・能生町観光物産センター取締役
今田亜樹・妙高市地域づくり協働センター地域支援員
◇コーディネーター
木村隆・新潟日報社執行役員上越支社長

本文敬称略

3市の連携

村山市長 まちづくり、物語紡ぐ時
野本さん 他地域を知ることから

木村　上越の提言では3市の連携は相手を知ることが大切だと強調された。

村山　上越市は14年前に14市町村が合併した。これも互いに知ることから始まった。まさに異質の共生だが、人口減少と超高齢化という変化が生じている。この時代を直視し、誰かとつながりながら人を育て、環境をつくる必要がある。3市連携の中でのまちづくり、物語を紡ぐ時代にきている。

木村　3市が互いに相手を知らない実感は何が理由なのか。

野本　地域づくりに関わっている人たちは地域やミッションをベースに動く。他地域を参考にはしても、連携する必要がない活動が多い。上越にいると日々、（周囲の人が）他の地域を知らないと感じる。まずは互いを知るところから始めたい。

木村　糸魚川ではそもそも連携が必要なのかという意見があった。

清水　例えば商売をする上で「3市だけではなく、もっと広い連携がいい」という声があった。連携するからには、今以上のメリットが必要だ。メリットを生むために、明確な目標設定をしなければならない。目標が曖昧なまま連携しても、結果として何が残るのかという意見だった。

木村　妙高は糸魚川に比べると上越と近い。連携の現状や課題は何か。

今田　「隣の芝生は青い」という言葉がある。妙高の人が同じファミリーレストランに行くのでも、わざわざ上越の店に行くことがあると聞く。青さはつまり「よく見える」こと。よく見えることを、3市で互いに引き出し合うような連携方法があるのではないか。課題や目標が共有できていないので、連携の必要性が今は見えない。今回をきっかけに共有できたら、どこを連携する必要があるのか見えてくると考える。AIが進化する未来を前提に、多様で自由な連携を3市でできたら面白い。

2次交通

清水さん 不便さも魅力に転換を
今田さん 外国人と住民 課題同じ

木村　拠点駅などからの3市の連携を広げるため、2次交通の充実も大切だ。

清水　糸魚川は谷が多く、幹線から外れると、車で随分行かないとたどり着けない場所も多い。2次交通は非常に難しい問題。ただ、不便さも糸魚川スタイルとして訴えていけないか。人の手が入っていないからこその景色というふうに、悪いところもいいふうに転換できないか。

木村　妙高はインバウンドが増えている。各所に誘導するには苦労も多いのではないか。

今田　2次交通の運行本数が少ない。乗り換えに時間がかかる。ダイヤが分かりにくいなどの課題がある。ただ、外国人が困っていることは、住民も同じく困っているはず。みんなが2次交通について課題を共有し、協働していくことが利便性の向上につながる。そうすることでインバウンドとのコミュニケーションの場もできていくと思う。

観光推進

米田市長 地域資源磨き一体的に
入村市長 結束して県全体で発信

木村　糸魚川、妙高の2市はそれぞれ官民一体で観光地づくりを推進する「DMO」を組織している。県内では雪国観光圏（湯沢町など県内7市町村）などの取り組みもあり、DMOをもっと広域的にという提案もあった。

米田　交流人口の拡大は人口減少の中で避けて通れない課題で、地域の資源をどのようにアピールしていくかが大事。上越地方にはそれぞれの力があるが、限界を広げていくことも大切だ。それぞれで観光資源を磨き上げながら、3市一体となって対応できることを探し出していければいい。

入村　地域の諸課題に対し、私どもだけで解決できるかというところに問題の根本がある。DMOが動き出し、インバウンドや交流人口が拡大していく。そうした時代に県という全体の中でDMOとして作り上げ、世界に対して発信する必要がある。春にできるスキーと高田の桜をセットで売り込むという話もある。全部一括して勝負に出る時代だ。まず地元が結束して県の理解を得る。結果を求めて動く必要性を感じている。

今田　雪というのはとても大きな資源だ。雪を守るには山も川も海も必要で、妙高だけでは難しい。パウダースノーがなくなればインバウンドは来なくなる。住民自身が3市の価値を認識し、経済効果以外の効果を生み出せたら、自信と誇りを持てるようになるのではないか。

木村　糸魚川の提言では環状線構想の話があった。説明していただきたい。

清水　例えば糸魚川から白馬に行って、長野方面に回って妙高と上越を通ってまた糸魚川。一周3泊4日、4泊5日みたいなルート設定があればいい。山の方になかった海産物を糸魚川で味わって帰れる。満足度をプラスし、何十倍にも魅力が伝わるのではないか。道路や鉄道がつながっており、余計な設備投資はいらない。新潟空港、松本空港、富山空港など、空港をつなぐルートも可能だ。

未来のチカラ in上越 新潟日報

挑め、上越。

Joetsu Challenger's INTERVIEW
上越チャレンジャーズインタビュー

#001

上越の伝統を復活させる

仲六 青苧のいえ

原　理佐（はら りさ）

(47)

上越に、青苧（あおそ）をもう一度。

大阪府に生まれた原理佐さん（整体師）は、上越に住んで約10年。地元の人から「なぜこんなところに来たのか？」と質問されるたびに彼女は思う。「上越は、こんなにステキなところなのに、みんなには見えていないだけ」。みんなが良いところに気づき、上越が変わっていくことを原さんは願っている。そんな原さんの大きな瞳はまっすぐに未来を見すえている。

仲六青苧のいえ
ヒマワリ整体

高校生の時、大阪の近鉄劇場で「鼓童」を見て、すごくエネルギッシュな太鼓だなって思いました。会場でアースセレブレーションのチラシを見て、絶対に行こうと決めて、実現したのは10年後くらい。20代後半から30代半ばまで、毎夏、佐渡に通いました。帰り道は必ず小木から直江津行きの船に乗って。上越は高い建物が少ないから空が広くて、青くて、ご飯も美味しくて良いところだと思っていました。

ところがね、私は30代半ばで体調を崩しちゃった。神戸で働いていた時に手術をしたけれど、全く回復せず、立ち上がることもできないくらいでした。そんな時、ある整体に行ったら治ったんです。治らないってあきらめていたのに。だから、同じように苦しんでいる人を救いたいと思い、私もこの整体をやろうと思いました。紹介された先生が上越で開業していたので、再び上越に来ることになりました。技術を取得してから神戸で開業しようと思いましたが、治療院は不特定多数の人が出入りするので、アパートも貸してもらえないし、そもそもむちゃくちゃ高くて…。それで上越で調べてみたら、大家さんもやっていいよと言ってくださり、家賃も安い。なんていいところなんだ！じゃあ、私は上越でするわ！と、こちらに来たんです。

上越には知り合いがほとんどいないので、整体をやっていることを知ってもらおうと、歩いてまわりました。神戸だと門の外にポストがあって、チラシを入れておしまいだけれど、上越では、門があるけれど「どうぞお入りください」って感じ。中に入るとお家の方にも会うわけですよ。「いや〜なに〜？」って聞かれるから、お話することもあって。そうすると「がんばり〜や」と言ってもらって。とってもオープンでみんな優しい。そうしているうちに徐々にお客さんが増えていきました。

1年目は雪のことなんて全く分からないから、除雪にスコップが必要と言われた時には、神戸ではスコップは手シャベルのことだから、台所のお玉で代用しようとして呆れられたこともありましたね。そんな風だから、私のこと不憫やったんやないかなあ。(笑)みんなが手助けしてくれました。

私は雪が楽しいんです。神戸では雪が降らないから年間を通してあくせくしていた気がして。こっちは雪でリセットできるから、よく考えます。雪が大切な時間を私にもたらしてくれるので、心身のリハビリになるんです。

こちらに来て数年後に一級建築士の関由有子さんや雁木のまち再生の方たちと出会いました。関さんと街づくりのイベントについて話していた時に、昔はこちらの特産品だった「青苧（あおそ：からむしの表皮からとれる繊維）」の話題がでました。葉は食べることができて、栄養価が高いこと、茎は越後上布の原材料であることを話しているうちに、青苧でイベントをやろうということになりました。ところがまわりに青苧のことを知っている人があまりいない。じゃあ、自分でやろうと思い、調べ始めたら、栽培して糸にして織るまで、すんごい時間がかかる！だからイベントは、見送り中。

青苧のことを調べているうちに、上杉謙信公のことも知り始めて、謙信公にとって青苧は軍資金だったこと、青苧から越後上布を織って、京都や大阪に売って、その税金で潤ってはったと知ったんです。それなのに今ここにはない。福島と山形にしかない。上越の人たちは青苧のことあんま知らんし、なんでー？って。謙信公のこともそこまで興味がなさそうだし。山形ではあんなに盛り上がっているのに。

お館さま（謙信の愛称）はいなくなってしまった。しゅんとしてしまっている感じ。なので、もう一回それを呼び戻せへんかなあ、と。上杉謙信公という歴史的背景が色濃くあった上越で、「青苧」がもう一度、根づかへんかなあという思いで栽培を始めたところです。1年目は山形から根を取り寄せて植えましたが思うようにいきませんでした。2年目は土づくりからはじめて、今年は青々と育っています。親株を育てて、これから増やして。うわぁ先の長い話やわ（笑）。でも、あきらめないですよ。その先が見たいから。好奇心！これで上越がどうなっていくのか見たい！

上越産の青苧を育てて「THE上越」を作りたい。越後上布のようなものは、まだまだ先の長い話ですけれど、グッズを作るのが良いのではないかというアドバイスをいただいています。おじいちゃんやおばあちゃんに青苧の栽培や糸にする手仕事を手伝ってもらったり、小学校の子どもたちが青苧を刈り取ったり、お茶を作ったり。みんなでワイワイできればいいなあと。青苧から何かの産業ができて、そこに関わる人がいて、お休みしていた畑がよみがえる、そんな景色がみたい。今は私がやっているけれど、いつかはみんなが適材適所で、新たな伝統として引き継がれていくと良いですね。昨年から、住まいと治療院が一つになり、余った部屋を「青苧のいえ」として民泊に活用中。いつか旅の方たちにも、上越の青苧でつくった製品や、体験を提供できたら良いなあと思っています。

田中産業株式会社は、上越のさまざまな挑戦を応援します。